

動詞句における削除と空所化に関する一考察と諸問題¹

根 本 貴 行

A Study of Deletion and Gapping Constructions in Verb Phrases and Its Problems

Takayuki NEMOTO

ABSTRACT

Lobeck (1990) states that deletion constructions including VP deletion, sluicing and N' deletion are licensed by agreement in functional categories which are just above the deleted phrases. I claim in this thesis that gapping and pseudo-gapping in verb phrases falls into the same mechanism as deletion constructions; if a remnant constituent in gapping and pseudo-gapping constructions make a movement out of a deleted verb phrase, as Lasnik (1995) hypothesizes, then the remnants attach to vP, which is one of the functional categories required in order to check such things as EPP feature. Furthermore, information construction predicts grammaticality about deletion and gapping constructions in a different way from syntactic analyses. I propose that a property of gapping construction is almost always followed by an information construction. I will not only discuss the properties of these constructions, but also indicate some unsolved problems in this type of construction.

1. はじめに

動詞句削除が動詞句全体の削除により主語と助動詞を残してそれ以下が削除される一方で、空所化では助動詞と動詞句の一部が削除され、文末に付加詞や直接目的語などが残留する現象を指す。さらに助動詞も残留する擬似空所化と呼ばれる現象も観察されている。

本稿では動詞句における空所化について、以下の点を論じていきたい。はじめに、動詞句削除はVP全体の削除により生じるが、空所化において残留要素が生じるのはどのようなメカニ

ズムによるものなのかを考察したい。帰結として、削除操作についてLobeck (1990)の主張する機能範疇における照合に続く構成素の削除という一般化が、空所化にも当てはまるのではないかということを提案する。次に、残留要素が削除部位から非削除部位へ移動することにより削除を免れるという先行研究をもとに、移動のメカニズムを論じる。さらに、残留要素と削除される要素の情報構造について、もし削除や空所化にかかる統語上の制約と情報構造の両方が普遍的な特徴を見せるとすれば、文法性の予

1 先行研究における例文以外のところでは、文法性の判断はA. W. Young氏とJ. B. Jones氏による。両氏からは文法性の判断に加え有益なコメントも頂いた。

測は一致するのかを検証する。そして情報構造を考慮することで、動詞句削除と空所化に関して、前者が従属節に生起可能であるのに対し、後者が不可であるという制約が説明できることを述べていきたい。

2. 動詞句削除と空所化、擬似空所化

空所化は動詞句削除と異なり、動詞句の一部が削除され文尾に削除を免れた残留要素が生じる。

- (1)a. Because Mary might, John will attend the rally. (Lobeck 1990)
 b. Mary met Bill at Berkeley and Sue at Harvard.
 c. *Mary met Bill at Berkeley and Sue ϕ . (有本・村杉 2005)
 d. Bill will buy her dolls and Mike, [~~will buy her~~] a handkerchief.
 e. *Bill will buy Mary dolls and Mike, [~~will buy~~] Smith [~~dolls~~].

(1) a の動詞句削除は、助動詞 might を除いてそれ以下の動詞句が削除されている。一方、(1) b の空所化では、削除された部位の後ろに at Harvard が残留している。空所化では削除される部位が動詞句の末尾であってはならず、(1) c が示すとおり動詞句の末端が削除されると非文法的となる。尚、空所化では助動詞も含めた部位が削除の対象となり、さらに二重目的語構文における空所化では、助動詞に加え動詞句の末端ではない間接目的語までが削除され、直接目的語は残留する。直接目的語が削除され、間接目的語が残留している(1) e の例は非文法的な文となる。

さらに、(1) a の例が示すとおり動詞句削除文は従属節に生じるが、例(2)の通り空所化はこれ

が許されない。また空所化が空所の先行詞に先行することはできない。

- (2)a. *Because Sue meat, John ate fish.
 b. *Sue meat, and John ate fish. (ibid)

空所化において助動詞を含めた部位が削除の対象となることに関して、Lobeck (1990) は、動詞句削除は機能範疇 (TP) における一致が起こることによって削除がライセンスされると述べている。このシステムは動詞句削除にとどまらず、N' 削除や疑問文削除 (slucing) にもも当てはまり、削除構文が統一的に説明がなされるようになった。

- (3) a. Although John's friends were late to the rally, [_{NP}Mary's [_{N'} e]] came on time.
 b. Mary knew someone was speaking at the rally, but she didn't know [_{CP} who [_{TP} e]]. (ibid)

N' 削除の例である(3) a についても、Abney (1987) による DP 仮説を用いると中間構成要素の削除ではなく最大投射の削除として捕らえることが可能であるし、機能範疇での一致に基づいて削除を扱うことが出来るようになる。

- (4)a. [_{DP}many [_{D'} D [_{NP}[_{N'}friends]]]]
 b. [_{DP}Mary [_{D'} 's [_{NP}[_{N'}friend]]]]

(4) a では DP 指定部の many と friends が数の一致が起こらなければならない。文における主語と動詞の一致と同様に、D と friends の間で一致が起こるとしよう。(4) b においても friend が D と一致を起せば、この一致が NP の削除をライセンスすることができると考えられ

る。(3) b の疑問詞文削除も同様に、機能範疇 CP での一致に基づいてそれ以下の部位 (TP) が削除される。

ここで共通しているのは、機能範疇で一致が起こると、それ以下の構成素が削除されているという点である。機能範疇の照合に続く構成素の削除ということが全ての削除現象に適用されるところならば、削除に際して一部の要素が残留する空所化についても同じことが当てはまるものであろうか。システムの先行詞を参照し、一つ一つの要素に対して削除の操作を適用して派生する方法より構成素を一度に削除する方が操作として経済的であるし、いわゆる極少主義的な文法モデルの上でも叶っていると考えられる。

Jayaseelan (1990) や Lasnik (1995) によれば、助動詞を除いた部分が空所化される、いわゆる擬似空所化は、残留要素が削除される部位から移動することにより削除を免れると述べている²。

- (5) a. John gave Bill a lot of money, and Mary ~~will give~~ Susan a lot of money.
 b. ...and Mary will Susan [_{vp}give t a lot of money]— (Lasnik 1995)

(5) b が示すとおり、目的語 Susan が動詞句から動詞句の前に移動することにより、削除を免れ残留する結果となっている。

擬似空所化では間接目的語や付加詞の残留は認められるが³、直接目的語の残留は認められない。

- (6) a. *John gave Bill a lot of money, and Mary ~~will give~~ Susan a lot of money.
 b. This wasn't noticed by the police, but it was ~~noticed~~ by a neighbour.
 (a = Lasnik (1995), b = Jayaseelan (1990))

空所化では(1)で示したとおり間接目的語が削除の対象となる一方で、擬似空所化では直接目的語が削除の対象となる ((7) ab = (1) de)。(8)で各構文の統語特性をまとめた。

- (7) a. Bill will buy her dolls and Mike, [~~will buy her~~] a handkerchief.
 b. *Bill will buy Mary dolls and Mike, [~~will buy~~] Smith [~~dolls~~].

(8)

	削除対象	残留要素
動詞句削除	助動詞・動詞以下	助動詞
空所化	助動詞・動詞・間接目的語	直接目的語
擬似空所化	動詞・直接目的語	助動詞・間接目的語

次章ではこれらの派生と削除のシステムを検証してみたい。

3. 構成素の削除

既に言及したとおり、削除操作は削除される語彙が削除対象であるかどうかを一語一語検証するのではなく、構成素そのものに適用される操作であると考えべきであろう。動詞句削除は Lobeck (1990) のシステムに従い、さらに現行のシステムに言い直せば機能範疇の一致に

2 残留要素がどのような理由で削除部位から移動するかは、重名詞句移動や先行詞内削除 (Antecedent Contained Deletion: ACD) における数量詞移動、格付与による移動などが挙げられる。Lasnik (1995) が主張する格付与による移動が有力であると思われるが、それぞれに問題が付帯する。詳細は根本 (2008) を参照。

3 受動態の行為者 (by 以下) がどの位置に付加しているかは意見の分かれるところであるが、擬似空所化において by 以下が残留するという事実からは、少なくとも vP 以上の位置に付加していると仮定される。

基づく vP 以下の削除であると考えられる。(9) b で(1) a の従属節の構造を示した。

- (9)a. Because Mary might, John will attend the rally.
- b. [_{TP} Mary_i [_{T'} might (EPP) [_{VP} t_i [_{V'} attend_j [_{VP} [_{V'} t_j the rally]]]]]]]
- c. We want to invite someone, but we don't know who.
- d. ... [_{CP} who_i C (EPP) [_{TP} t_i T [_{VP} t_i want to invite t]]]

(9) b において、主語の Mary は基底位置の vP 指定部から T の EPP 素性を満たすために TP 指定部へ移動する。移動と格照合については Chomsky (2000) の「探査」(Probe-Goal) のシステムを仮定しよう。概略、格素性を持った機能範疇が Probe となり、照合可能な要素を探し照合するシステムで、照合は統語要素の移動を伴わず行われる。従って、主語 Mary が移動するのは格素性による誘引ではなく EPP 素性による誘引ということになる。同様に、間接疑問縮約の(9) c でも、(9) d の通り、疑問詞 who が機能範疇 CP 指定部で照合が行われ、以下の TP が削除されている。wh 疑問文の主要部 C には派生の過程で照合により消去されなければならない素性である [+wh] が仮定されるが、これが「探査」要素となり文中の wh 素性 (この文では who) と照合が行われる。顕在的に who が文頭へ移動するのは、C にある EPP 素性のためである。そもそも EPP 素性につて、Chomsky⁴ は次のように述べている。

- (10) Optionally, OCC should be available

only when necessary, that is, when it contribute to an outcome at SEM that is not otherwise expressible...

(Chomsky 2000. p. 10)

EPP 素性による音声素性の誘引は、主語 DP の移動にせよ疑問詞の移動にせよ、その出力において作用域の相違を伴う移動でもあり、この意味で SEM (意味解釈) 部門における出力を変える移動であるということが言える。

削除文についても、削除を伴う文と伴わない文の間には意味解釈における差異が生じる⁵。故に、空所化や擬似空所化で残留要素が削除部位から移動する動機において、EPP 素性が関わっていると仮定することが可能である。始めに擬似空所化の例から見てみよう。(11)=(5))

- (11)a. John gave Bill a lot of money, and Mary ~~will give~~ Susan ~~a lot of money~~.
- b. ... [_{TP} Mary [_{T'} will [_{VP} Susan_i v (EPP) [_{VP} ~~give t_i a lot of money~~]]]]]

この例において、間接目的語の Susan は v の EPP 素性によって誘引されている。ただし、格照合は EPP 素性に誘引される以前に v による探査によって行われている。通常の格照合以外に擬似空所化をのための先見的操作である EPP 素性による誘引が仮定は、局所的な経済性の原理にを考慮すると妥当かどうかという問題は生ずる。もし擬似空所化の残留要素が EPP 素性により vP 指定部に移動してくるとすれば、ここで EPP 素性との照合が行われる。機能範疇 vP において照合が行われた結果、VP の削除がライセンスされたと考えられ、Lobeck の一

4 ここでは音声素性を誘引する素性を OCC 素性と呼んでいるが、EPP 素性と概念的に同じものであると考えられる。

5 詳しくは有本・村杉 (2005)、根本 (2008) を参照。

般化が擬似空所化にも当てはまることとなる。Lasnik (1995) は Koizumi (1995) の Agr に基づく格照合システムに従い、残留要素の移動には格照合のための AgrOP への移動であると仮定しているが、いずれにせよ二重目的語のうちより上位の要素、すなわち間接目的語だけが誘引される対象となるため、直接目的語の動詞句からの移動は不可能であり、残留も許されない。

次に空所化を見てみよう。空所化では助動詞および動詞句が削除対象であり、擬似空所化と異なり直接目的語が残留要素である。(12)=(1d)

- (12a. Bill will buy her dolls and Mike, [~~will buy her~~] a handkerchief.
 b. ... [_{TP} Mike_i [_{T'} will [_{VP} t_i buy_j [_{VP} her [_{V'} t_j a handkerchief]]]

空所化についても Lobeck の一般化があてはまるだろうか。vP に EPP 素性があつたとしても、vP の位置から誘引可能なのは間接目的語のみで直接目的語が移動する可能性はない。Jayaseelan (1990) と Lasnik (1995) は擬似空所化における残留要素の移動についてではあるが、重名詞句移動の可能性を探っている。結論として、擬似空所化では間接目的語が動詞句から移動することが仮定されているにもかかわらず、二重目的語構文における外置では直接目的語が移動することから、擬似空所化に外置を適用することはできない。しかし、直接目的語が外置の対象となる観察結果はむしろ空所化構文に仮定されうるシステムであると考えられる。

- (13a. *John gave t_i a lot of money [the fund for the preservation of VOS languages]_i.
 b. Jon gave Bill t_i yesterday [more

money than he had ever seen]_i.
 (Lasnik 1995)

(13b から分かる通り、外置される要素は文末の副詞より外側に移動している。外置される要素と副詞の相対的な位置を見てみよう。副詞の位置は(14)で示されるとおりである。

- (14 (Yesterday,) who (*yesterday) did (*yesterday) Mary (*yesterday) met (yesterday) ?

yesterday のような時副詞は基本的に文の両端に現れるため、疑問詞よりも高い位置に付加していると考えられる。(13b が示している通り、時副詞の外側に位置している外置要素は CP 付加であると考えられる。重名詞句移動や外置による移動操作は随意的でありスタイリシティックな移動として統語論上の諸制約が当てはまるか議論の分かれるところである。仮にこの移動も EPP 素性による誘引が関わるとすれば、CP の EPP 素性が誘引することとなる。ただし、システム上いくつかの諸問題が生じる。問題の一つは、主要部 C の EPP 素性が誘引できる素性は、一般的な wh 移動と同様により C に近い構造上上位にある位置にあるものである。左側への移動が wh 移動と同様の制約に従う一方で、外置は右側への移動であり、Hukui (1993) が述べているように主要部を越えない移動であるため諸制約に従わず、EPP 素性に対して誘引される候補となりえるのかという問題である。二つ目に、Chomsky (2004) による位相のシステムのもとでは、位相とされる CP と vP ごとに「書き出し」(Spell-out) されるため、位相を越えて要素が移動する際は一度位相の周縁部 (vP や CP の指定部) を経由して移動しなければならない。もし、C の EPP 素性が直接目的語の右

側への移動を誘引したとしても、vP 位相を超えた移動となるため vP 指定部（あるいは右側への vP 付加位置）を経由して上位の CP 位相へ移動しなければならない。これらの諸問題については今後の研究課題としなければならない。一方、外置が EPP 素性による誘引のような義務的な移動であると仮定すれば⁶、外置（重名詞句移動）による移動が一文につき一要素に限られるということが説明される。

- (15) *The teacher gave t_i t_j the day before yesterday [more magazines than everyone had expected] _j, [the student who was writing a thesis about linguistics] _i.

外置要素が CP への付加であるとすれば、外置に伴う空所化において、外置要素が時副詞の外側に現れることが予測される。

- (16a. Bill gave Mary yesterday more books than she had ever seen, and Henry, the day before yesterday more magazines than she had expected.
b. [_{CP} [_{CP} EPP [_{TP} Henry [_{T'} (~~did~~) [_{VP} give_i [_{VP} Mary t_i t_j]]]]] yesterday] more magazines than she had expected_j]

(16)はインフォーマントの直感として文法的であると判断された。(16b)は(16a)の等位節後半の構造である。動詞句から重名詞句が CP の右側へ移動し C の EPP 素性を照合している。Lobeck の一般化と Abney (1987) の DP 仮説により、動詞句削除文、間接疑問文縮約および N' 削除文は機能範疇における照合によりライセン

スを受けた最大投射が削除されると考えられているが、(16b)では機能範疇 CP における照合に続いて T' 以下が削除されている。空所化でのみ中間投射以下が削除対象となってしまうが、Chomsky (1995) 以降の投射の概念では、ボトム・アップ式に投射される途中で、ある投射 X が派生に導入され、それ以上投射しなければ最大投射である。この最大投射にさらに別の統語要素が融合 (Merge) して投射すると、もとの最大投射は中間投射になる。従って、(16b)において、vP まで進んだ派生に T が導入され vP と融合した段階では構造自体が最大投射の TP であるが、さらに派生が進み主語 DP が TP に移動してきた段階でそれまでの最大投射 TP は中間投射の T' となる。

- (17a. [_{TP} did [_{VP} Mary give_i [_{VP} Mary...]]]]]
b. [_{TP} Mary_k [_{T'} did [_{VP} t_k give_i [_{VP} Mary...]]]]]

ただし、(16)において、実際に T' が削除されるのは動詞句から重名詞句が CP へ移動した後であり、この段階では T' は既に中間投射となっている。さらに既に述べたとおり、動詞句から CP への重名詞句の移動は vP 位相を超えるため、一度 vP 指定部（厳密には vP 付加位置）を経由しなければならないことになると考えられるため、削除のタイミングについてさらなる精査が要される。

ここでは機能範疇に EPP 素性を仮定することで、動詞句削除のみならず、空所化や疑似空所化でも Lobeck の一般化が適用される可能性があることを探ってみた。

6 Hukui (1993) では、主要部を超える移動は素性照合などの動機付けが必要であるが、主要部を越えない随意的移動についてはその限りではないことが述べられている。

4. 構成素削除と副詞

これまで見てきたとおり、一連の削除構文や空所化は一樣に機能範疇における照合とそれ以下の構成素の削除操作である。しかし、以下の擬似空所化のインフォーマントによる文法性の判断において、削除される構成素が最大投射ではない可能性もあり、さらに残留要素の移動先が構造上決められないという問題が生じてくる。

- (18) I would quickly turn my head away from the sound of the firecrackers,
 a. [?]and Bill would always, his eyes.
 b. ^{*}and Bill would always do his eyes.

- (19) I quickly turned my head away from the sound of the firecrackers,
 a. [?]and Bill swiftly did, his eyes.
 b. ^{*}and Bill did his eyes swiftly.
 c. [?]and Bill did swiftly his eyes.

- (20) Bill often buys her dolls,
 a. and Mike, a handkerchief often.
 b. [?]and Mike, always a handkerchief.
 c. ^{*}and always Mike, a handkerchief.

(18b) が非文法的との判断がなされているのは、そもそも擬似空所化として本動詞 *do* が残っているからであるが、以下の構造で示すとおり、本動詞が *v* まで主要部移動し VP が削除される構造では残留する目的語の移動先を示すことが出来なくなる。

- (21) [_{TP} Bill [_{T'} would [_{VP} always [_{VP} [_{v'} do_i [_? his eyes_j [_{VP} t_i t_j away from the sound of the firecrackers]]]]]]]

(18a) の例を見ると、動詞の所在については動

詞が *V* から *v* へ主要部移動した後で *v'* が削除されているという見方と、*V* から動詞が主要部移動する前のタイミングで VP が削除されているという見方が可能である。(18a) では、時副詞の *always* が認可されており、時副詞が付加した主要部より低い投射（中間投射以下）が削除されることが技術的に可能かどうかという問題が生じてくる。

- (22) [_{TP} Bill [_{T'} would [_{VP} always [_{VP} his eyes_j [_{v'}-(do)_i [_{VP}-(do)_i t_j away from the sound of the firecrackers]]]]]]]
- 移動後の削除 移動前の削除

(19) の例に関しては *did* が助動詞であると解釈しなければならない。副詞が TP に付加しているとすれば(19a) の語順は説明されるが、(19c) では語順が説明されないことから容認度が低下していると考えられる。一方、(20) は空所化の例である。これまで述べてきたように残留する目的語は重名詞句移動（外置）によって削除を免れている。外置によって目的語が CP の右側に付加しているとすれば、副詞 *often* より右側に生じるはずであるが、インフォーマントの判断は(20a) が示している通り、「残留目的語—副詞」の語順を文法的であると判断している。さらに問題となるのが(20b) で、ここでは文中に時副詞が位置している。空所化は助動詞以下が削除される構造であるが、*T'* 以下に付加していると考えられる副詞が文中に残留している文に対して、インフォーマントは容認しており、改めて削除される部位と構造を検証する必要がでてくる。

- (23) [_{CP} [_{TP} Mike [_{T'} does [_{VP} always [_{VP} buy_i [_{VP} t_i t_j]]]]]]] a handkerchief_i]

5. 削除要素、残留要素と情報構造

文は旧情報から始まり文尾へ行くにしたがつ

て新情報へと流れる (Kuno 1978)。

(24) What did Bill buy for Mary?

- a. He bought her a doll.
- b. *He bought a doll for her.

(24b) は既に Mary が既知の情報、すなわち旧情報であり代名詞が用いられているにもかかわらず、for her が新情報の期待される文尾に置かれており容認度が低下している。

高見 (2001) では情報の流れの制約とともに文中で削除される要素について、以下のような機能的制約を用いて説明している。

- (25a. 情報の流れの原則：強調のための強勢や形態的にマークされた焦点要素を含まない文中の要素は、通例、旧情報（より重要でない情報）から新情報（より重要な情報）へと配列される。
- b. 削除/縮約に課される機能的制約：削除されたり縮約される要素は文の焦点であってはならず、非焦点要素のみが、削除されたり縮約されたりする。

はじめにも述べたが、動詞句削除は従属節に現れるが空所化はその限りではない。また空所化は空所化を伴った文に先行することができない。(26a=(1) a, (26b, c=(2) ab)

- (26a. Because Mary might, John will attend the rally.
- b. *Because Sue meat, John ate fish.
- c. *Sue meat, and John ate fish.

この問題を考える前に次の例を見てみよう。

(27) What will they buy for Mary?

- a. Bill will buy her a doll, and Mike will a handkerchief.
- b. Bill will buy a doll for her, and Mike will a handkerchief.
- c. Bill will buy her a doll, and Mike a handkerchief.

(27)の疑問文に対して a では等位節後半で動詞と直接目的語が削除された擬似空所化となっており、構文として不適当である。一方 b では動詞と間接目的語が省略されており擬似空所化としては文法的であるが、等位節前半で示されている通り旧情報の for her が文尾にあり情報構造として適当な文ではない⁷。(27)の疑問文に対する受け答えでは等位節の後半で助動詞が旧情報となるため削除対象とならなければならない。従って(27)の疑問文に対して最も適しているのは空所化による回答の(27)c である。(27)の疑問文に対する回答として空所化が生ずる場合は、統語的制約と情報構造的な制約が異なることが分かる。統語上の制約が各話者が学習によって習得したとは考えにくく、言語知識として生得的なものであるという考えは生成文法一般に仮定されていることである。同様に、情報構造における制約も、文法性の予測が概ね画一であることから学習により習得されるもとであるとは考えにくく、普遍的なものであると考えられる。

空所化や擬似空所化の特徴は、動詞句削除と異なり新情報が空所化の後に残留するということである。(26)の例に戻ると、(26c) は空所化を含む文が等位節の前に現れ、新情報を含む動詞が削

7 インフォーマントの判断として興味深いのは、(27)ab において等位節後半は同じ文であるが構造上省略されている箇所が異なるため、擬似空所化として文法的な (27)b 等位節後半を情報構造上適切な (27)a の等位節後半部に変えれば最も最適であるという判断であった。詳しくは根本 (2008) を参照。

除されているため非文法的な文となっていると説明できる。問題は(26b)で、空所化を含む従属節が先行しているが、後続しても同様に非文法的な文である。しかし、従位接続詞が主節 CP に付加しているとすれば、従属節は主節に対して上位に位置し、以下のような代名詞の例も説明可能である。

- (28)a. If he_i feels good, John_i will go.
 b. If John_i feels good, he_i will go.
 (Quirk et. al.)

従属節が後続する文でも後方への代名詞指示が可能であり、この点からすると主節より上位に位置する従属節は主節に対して旧情報を述べなければならず、(26b)では新情報の動詞が省略され、新情報の残留要素が現れており容認されないのではないかと考えることができよう。

6. 結語

削除や空所化は、情報の新旧によって行われる操作の一つであると考えられる。これらの構文の特徴を考察する際は、統語上の制約に加えて情報構造の制約も考慮する必要がある。統語上の制約については、Lobeck (1990) による一般化が削除文のみならず空所化にも当てはまる可能性がある一方で、副詞の生起位置等を考えると、削除されている要素が最大投射では無い可能性を依然として否めない。また、情報構造からこれらの構文を眺めると、従属節において空所化が生じない事実を説明可能ではないかということも見た。明らかに、言語活動は、同じ文法コードを持った話者同士が行う活動である。普遍的な統語上の制約に加え、機能的、もしくは語用論的な情報構造上の制約も言語活動に関わっているのは確かであろう。この二つのコードには少なくとも擬似空所化において文法性の

乖離があるように思われる。

参考文献

- Abney, S. P. 1987. *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*. Ph. D dissertation. MIT.
- 有元将剛、村杉恵子. 2005. 『束縛と削除』研究社
- Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Chomsky, N. 2000. 'Minimalist Inquiries.' In R, Martin, et al. (ed) *Step by Step : Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. MIT Press.
- Chomsky, N. 2004. 'Beyond Explanatory Adequacy.' Belletti, A. (ed.) *Structures and Beyond : The Catagrophy of Syntactic Structures*, Vol. 3. Oxford Univ. Press.
- Hukui, N. 1993. 'Parameters and Optionality,' *Linguistic Inquiry*, 24.
- Jayaseelan, K. A. 1990. 'Incomplete VP Deletion And Gapping.' *Linguistic Analysis*. 20.
- Koizumi, M. 1995. *Phrase Structure in Minimalist Syntax*. Ph. D dissertation. MIT.
- Kuno, S. 1978. 'Gapping : A Functional Analysis.' *Linguistic Inquiry*. 7.
- Lasnik, H. 1995. 'A Note on Pseudogapping.' *MIT Working Papers in Linguistics*. 27.
- Lobeck, A. 1990. 'Functional heads as Proper Governors' *NELS* 20
- 根本貴行. 2008. 「擬似空所化の残留要素—統語構造と機能的制約の狭間で—」『日英の言語・文化・教育—多様な視座を求めて』日英言語文化研究会(編) 三修社(出版予定)
- 高見健一. 2001. 『日英語の機能的構文分析』鳳

書房

Qirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J.
Svartvick. 1985. *A Comprehensive Gram-
mar of English Language*. Longman.